岩手教区報

第352号
立教185年４月１日
天理教岩手教務支庁
盛岡市馬場町3-40
TEL 019-622-7962
FAX 019-623-9597

岩手教区長を拝命して

教区長　鈴木眞彦

この度、届かない者が岩手教区長にとの御命を賜り、重責を担わせて頂くことになりまして、大きな責任を感じております。

昨年の暮れ、中田善亮表統領先生より思いもよらぬお電話を頂戴いたしました。あまりに突然のことにて当惑し、まさしく青天の霹靂でございました。

そんな折、昨年の秋季大祭における宮森与一郎内統領先生の講話を読み直すことがありました。内統領先生は、この先を心配する私たちに向けて、先人たちが教祖ひながたを頼りに通ってきたように、「コロナの時代であっても、私たちの心の持ちよう一つによって、おたすけのご守護を頂ける機会となるはず」とされて、「こんな時だからこそ、たすけ一条の姿を教祖にご覧いただきましょう。そのための知恵を出し合って、心の向きを間違わないよう、ひながたの道を踏み外さないよう、この先の道を勇んでおたすけに歩ませていただきましょう」と語りかけて下さいました。

この箇所を読み返すうち、このような時だからこそ教祖の御心を求め、心の持ち方を思案して歩ませていただくことだ、と思えるようになりました。

さて、いよいよ来年の春季大祭より、教祖百四十年祭三年千日活動に入ります。中田表統領先生は、「私たちの年代が抱えている百年祭前後の年祭のイメージというものは一旦横に置いて、今の状況における年祭活動を思案しなければならない」とお話しになり、過去の年祭活動の習う所は習い、反省するところは反省して取り組むよう、次の年祭活動の充実を期しておられます。また、年祭活動は来年が実践のスタートとなりますので、今年はその準備期間ということになります。

その活動スタートまで九か月余りです。先人が教祖年祭を成人の旬と捉えて、力強く歩んできた道の歴史にあらためて思いをいたし、まずはスタート前のウオームアップを図るときと考えます。そして、岩手教区として、今の時代、今の状況に合った年祭活動を思案いたし、オール岩手教区で取り組んで参りたいと思います。

前任の加藤先生には及ばず、誠に浅学非才な私ではございますが、誠心誠意努めさせていただきたいと存じますので、岩手教区管内の皆様方のお力添えを何卒よろしくお願い申し上げます。

信仰随想　法楽

前岩手教区長　中田俊次

「生きる意味」

かなり以前に上映されて話題になった、『生きる』という黒沢映画をご存知でしょうか。人はどのようにして生きる意味を見出せばよいかを考えさせられた作品でした。

渡辺という主人公は、市役所の市民課長として30年もの間、毎日単調な仕事を繰り返してきた役人でした。ある日の事、彼は胃がんに犯されていることを知らされるのです。その彼は妻に先立たれた上、一人息子は結婚して家を出て一人ぼっちになります。孤独な環境の中、夜の歓楽街をさまよい、生活はいきおい乱れ放題となってしまいます。そんな矢先、一寸したきっかけで、人のためになる何かをやりたい、と思い立つのです。そこで早速、住民から提出される申請書を、今までは右から左へ事務的に廻すだけだった書類に、じっくり目を通してみるのです。

この時、彼の目を引いたのは下水溜まりの埋め立て工事と子供のための公園建設に関する陳情書でした。

病状は以前より進行しているであろうはずの彼は、俄然、役所内で行動を開始するのです。しかし、新規の仕事を増やしたくない上司の決済は容易に得られなかったり、利権もからみ、またやくざからのおどしを受けたり、数々の抵抗に遭遇するのですが、彼は断固ひるまず遂に決済に漕ぎつけ、地域の子供たちの喜ぶ公園も見事完成させるのです。

その夜、彼は生涯で初めて必死になり、他人様の喜ぶために造った公園に出かけるのです。そして小雪の舞う中でブランコを揺らしながら、感無量の思いで「ゴンドラの唄」をしみじみと口ずさみながら、彼なりの「生きる意味」を見出し、一人の人間の生きる喜びを体感することになるのです。

今の世の中は、「よろこび志向」より「たのしみ志向」を優先する時代かと思われます。「たのしみ」はわが身の快感、快楽を中心としているのに対し、「よろこび」は他人のために役に立つ、或いは他人を助けるなど他人様に何らかの影響を与える事で得られるものでしょう。

カラオケやゴルフなどの楽しみは金銭で得られるものでしょうが、他者をたすける活動や、前掲の映画の主人公の生き様の中に得られる「よろこび」は、ようぼくお互いの信仰の中に実践を求められる「生きる意味」につながる「よろこび」と申せましょう。

訃報

沢崎ミヨ（89歳）
九戸支部・陸中戸田分教会
２代会長夫人
令和４年３月10日出直された。

行事予定――【４月分】

1日　役員会議（10時）
7日　広報部編集会議（18時）
9日　青年会支部リーダー
　　カンファレンス（18時）
13日　学生担当委員会例会on line（19時30分）
24日　女子青年例会（10時）
29日　全教一斉ひのきしんデー
〃　岩手教区ひのきしん強調月間
　　（～5月29日）
30日　婦人会例会（10時30分）
〃　少年会例会（12時）

立教185年
「全教一斉ひのきしんデー」
―提唱90周年の節目に―

いよいよ、今月29日は「全教一斉ひのきしんデー」です。そして、岩手教区では、４月29日から５月29日までをひのきしん強調月間と定めました。この期間内、教区管内が報恩感謝のひのきしんに勇み立つ姿をお与え頂きたいと思います。

各教会より提出頂いた参加目標は、合計千530人となりました。当初目標人数の千人を超えていますが、各支部、各会場での取り組みをもって、一人も多くの参加者となりますようお励み願います。また、現下の状況において、人数が集まっての実施が難しいと思われるなどして、教会やようぼく信者家庭単位で実施される場合も、参加者数にカウントされます。

そして、活動後の報告書は、①４月29日実施会場　②４月29日以外の実施会場　③教会やようぼく家庭単位での実施（教会毎の報告）となっていますので、もれ落ちなく報告下さるようお願いいたします。

また、今年のひのきしんデー参加者には、岩手教区より記念品があります。お楽しみにしていただきたいと思います。

さらに、５月29日には、教区でのひのきしんデーの集大成とも位置づける献血を主体とした「ひのきしんフェスティバル」を、教務支庁で開催します。趣向を凝らしたプログラムを用意していますので、多くのご参加をお願いいたします。

来年、教祖百四十年祭の三年千日活動がスタートします。この「全教一斉ひのきしんデー」が、まさしく年祭活動の足掛かりとなるようつとめさせていただきたいと思います。

献血推進委員会
「献血推進研修会」報告

去る３月２日（水）、教務支庁を会場に「献血推進研修会」を開催。教区役員など20人が参加した。

岩手県赤十字血液センター事業副部長佐藤泉悦氏を講師に迎え、プロジェクターを使用し、「コロナとの関連について」や「献血の必要性について」等の説明があった。何故献血が必要なのか。一日や一年間に輸血を受ける患者の人数と、輸血を支えている献血者数が示された。輸血を必要とする患者の85％以上が50歳以上で、多くは癌治療に使われている実態が報告された。今３人に１人が癌患者といわれる世の中で、献血の重要性がより深く感じられた。最後に２００６年広島で放映された、４歳の男の子にスポットを当て血液の尊さをテーマにしたビデオが映し出され、感動と共に、考えさせられる内容だった。この映像を５月29日のひのきしんフェスティバルで紹介してはどうかとの意見も出た。

「岩手教区献血たすけ合いの会」では、定期的に献血呼びかけひのきしんをさせていただいています。献血可能な年齢の方々も、沢山参加いただけたらと思います。宜しく御協力の程お願い致します。

青年会
「教区青年会ひのきしんデー」報告

岩手教区青年会は、３月13日（日）、久慈市舟渡海水浴場を会場に教区ひのきしんデーを実施。ＯＢ、婦人会、少年会員を含む10人が参加した。

午前９時、ひのきしん前に相澤元（はじめ）委員長より、「東日本大震災から早くも11年が経過した。被災した記憶を風化させてはいけないとの想いから、教区ひのきしんデーを行っている。今年は感染対策を考慮し、ごみ拾いを行うことにした。直接の被災地支援とはならないが、継続して行うことが大切だと思う」との挨拶があった。その後、駐車場やレストハウス周辺、そして波打ち際など、隅々までゴミ拾いを行い、10時30分解散となった。

学生担当委員会
「春の学生おぢばがえり」報告

岩手教区学生会と担当委員会では、今年の「春の学生おぢばがえり」は昨今の情勢を踏まえて個別での参加にて対応した。

岩手教区からは教会や家族単位での帰参、また親里管内の学生も直属などからそれぞれ参加となった。参加した学生は９人（３月30日現在把握分）。

３月27日にはライブ配信で「春まつり」が公開され、翌日28日には10時から「立教185年春の学生おぢばがえり」の式典が開催された。

式典で、真柱様のメッセージが代読された。「次代を担うようぼくへ」が今回のテーマだったが、真柱様は学生達に、いずれ道のようぼくへと成人していく上で、大切な門目である陽気ぐらしや元の理、教祖のひながた、心の遣い方などをわかりやすく説明くださった。

なお、帰参した際、他教区の交流行事に参加したり、別席を運んだ学生の報告も届いている。

参加者動員の上に最後までお声がけ頂き、ありがとうございました。